

第2章

大里七夕踊の改革を通して考える コミュニティの再編

俵木 悟

はじめに

筆者はこの「コミュニティ再編のグローバル研究」の研究プロジェクト期間を通して、鹿児島県いちき串木野市の大里地区で伝承される大里七夕踊の伝承実践の調査を続けてきた。この事例は筆者が初めて調査を行った2008年以来、伝承の危機が叫ばれながらも、それを克服するために担い手たちが自ら率先して改革を進めてきており、とくに踊りに参加する主体としての青年団や集落といったローカルな集団が、過疎化や少子高齢化といった日本の農村部に普遍的に見られる社会のグローバル化の余波を受けながら、関係性のあり方を再構築することで対処してきたプロセスを生々しく伝える興味深い事例である。

本稿は、この一つの民俗芸能の伝承実践の近年の改革を経時的に追うことで、コミュニティが再編される様相を具体的かつ実証的に把握し、あわせてそれをコミュニティの再編という論点に沿って理解するための要点を抽出して示すことを目的とするものである。

1. 大里における地域コミュニティの編成

(1) 調査事例と地域の概要

調査事例である大里七夕踊は、鹿児島県いちき串木野市大里で毎年8月上旬（現在は8月5～11日のうちの日曜日）に行われる民俗芸能である。踊りは大きく2種類から成る。一つは参加する各集落の青年団から踊り手を1人ずつ出して演じる太鼓踊^{テ・コ・オ・ドイ}で¹⁾、もう一つはシカ・トラ・ウシ・ツルという4体の動物の造り物と行列物を集落ごとに分担する垣回^{ツクイモン}である。この2種の踊りが大規模な風流の行列を構成し、1日をかけていくつかの踊り場を踊って回る。

参加するのは、大里地区の弘山、松原、堀、平ノ木場、中原、島内（以上川南）、宇都、門前、木場迫、中福良、寺迫、下手中、陣ヶ迫、池ノ原（以上川北）というの14の集落である²⁾。ただし現在この14集落での踊りは大きな曲がり角を迎えており、それが本稿の主題となる。

踊りの参加主体は、本稿において詳述するように、各集落の青年団である。とくに太鼓踊の踊り手を務めることは青年団員の責務であり、青年団を退団する条件にもなっている。また青年と並んで、踊りの指導者である庭割という存在が重要な役割を果たしている。庭割は原則として各集落から選ばれる、踊りに関する高度な知識と技量をもつと認められたマスターである。また現在は大里七夕踊保存会の主要な役員であって、踊りの実施に関わる全般的な指揮者である。

踊りが伝承されている大里地区は、大里川流域の低平地が開墾された大里田圃と呼ばれる田園地帯を中心とした一帯である。西部の東シナ海に面した一部は漁村であるが、主としては大里田圃で稲作農耕を行う農村である。また田圃の北東に広がる丘陵地を中心に、昭和初年頃から柑橘類の栽培が盛んになり、現在も温州ミカンやポンカンなどを生産し、大里の名産として知られている。さらに大里田圃のなかには温暖な気候を活かして冬期にイチゴなどを栽培する農園が見られたり、丘陵地の中原はかつてスイカの栽培が盛んであったりと、果樹栽培に特徴がある。ほかに地区内には食品加工場などの製造業もあり、とくに焼酎や醤油などの醸造業が知られている。なお大里地区の北西、湊町との境にはJR 鹿児島本線の市来駅があり、駅周辺は他所からの移入者を含む住宅地が広がっている。

大里地区は、藩政期には大里村として薩摩国日置郡市来郷に属し、現在も大里という地名は大字に相当するものとして地番に使われている。1889（明治22）年の町村制施行にあたって市来郷が東西に二分され、東市来村に長里・養母・湯田・伊作田・神之川の5ヶ村が、西市来村に湊町、湊、川上、大里の4ヶ村が属することになり、1930（昭和5）年に西市来村が町村制施行し市来町となった。以来、2005（平成17）年10月に串木野市と合併するまでは、日置郡市来町を構成していた3つの地区（川上、湊町³⁾、大里）の一つであった。

(2) 地域の自治組織としての公民館⁴⁾

大里地区は現在の住民基本台帳では21の公民館に分かれている。公民館とはこの地区における地域の自治組織の単位で、行政上は自治公民館と呼ばれる⁵⁾。

はじめにこの地域における自治組織としての公民館の成り立ちについて概略を示しておく。近世薩摩藩の土地制度としては、同族的な集団である門^{かど}ごとに耕地を割り当てる門割制度が知

られているが、明治中期には地縁的な生活共同体としての部落が存在したとみられる。『市来町郷土誌』によれば、明治の農会法に基づいて鹿児島県で農事小組合が誕生したのが1899（明治32）年で、市来町でもそれから遠くない時期に農業改良のための農事小組合が設立されたというが、これは部落単位に設けられたと考えられる（市来町郷土誌編集委員会 1983：485）。真鍋隆彦によると、大里地区では、農事実行組合（農事小組合）が1940（昭和15）年の内務省訓令「部落会町内会等整備要領」により結成された部落会と併存していたが、終戦後、部落会・町内会の廃止とともに既存の組織が解体した。その後、自主的団体として県外に出ていた人びとが帰郷して各部落に公民互助会を組織し、やがて公民館設立運動の影響を受けて1948（昭和23）年に「公民会」と称した。これに町が補助金を出すようになり、公民会は発展解消して部落公民館（部落分館）と称されるようになったという（真鍋 1972）。1948年4月に市来町公民会が結成された際には、その会則第2条に「この会は事務所を市来町役場内に置き、分会である部落公民会を町内各部落に設ける」と記されている（市来町郷土誌編集委員会 1982：487）。一方、地元の木崎三平は、部落会の結成が1943（昭和18）年頃、それが公民館に再編されたのが1951（昭和26）年としている（木崎三平・木崎正森 2005）。

以上のように、歴史的な細部についてはやや不明瞭なところが残るものの、公民館は戦前の部落会に相当する単位であり、一般的には町会や区会、自治会などと呼ばれる自治組織の単位と見なすのが妥当である。神田嘉延は、鹿児島・沖縄の自治公民館について論じるなかで、多くの自治公民館は「自治会・町内会・部落会としての地縁組織の集会・事務施設としての性格を強くもっている場合が多い」と述べ、「農村においては、伝統的な地縁組織であった部落会という言葉が差別用語であるということを教育委員会から指摘されて、農村の伝統的地縁組織であった部落会を自治公民館と名称変更したところが数多くある」と指摘している（神田 1998：203）。大里においても、住民は日常的に「部落」と「公民館」という言葉をほとんど区別せずに使用している。本稿内ではこの自治組織の単位を「集落」と呼ぶことにする。

なお自治公民館にはその上位組織として地域分館があり、さらにその上に地域公民館がある。地域公民館は旧市来町に市来町公民館（合併後は市来地域公民館）が一つあり、地域分館の拠点施設として大里地区には川北地区公民館、川南公民館があった。住民は川北／川南の地区公民館（地域分館）を「地域館」と呼び、また行政的には「地区自治公民館」と呼んで、その範囲を「地区」と位置づけてきた。旧市来町内には湊、湊町、川北、川南、川上の5地区がある。

(3) 新しい地域の自治組織：まちづくり協議会

集落ごとの自治公民館は現在も地域住民の生活に関わる基礎的な社会組織として機能しているのに対し、地域公民館・地域分館は、近年は独自の活動があまり行われてこなかった。しかし新しいちき串木野市が2007年3月に策定した「いちき串木野市第一次総合計画」において、施策大綱に「住民と行政とのパートナーシップによる『共生・協働のまちづくり』」が基本方針として掲げられた。2011年3月に策定された市の「共生・協働のまちづくり推進計画」では、従来の地区公民館に、当該地区内の婦人会やPTA、学校、消防団等の各種団体、さらにはNPOや企業等まで含む新たな地域自治組織として「まちづくり協議会」を設立し、これが「共生・協働のまちづくり」の主体となるとされた。これを受けて市民参画と協働によるコミュニティ活動の推進を図る拠点として、上記の地区公民館があらためて注目されることになった。大里の川北・川南地区では、それぞれの地区公民館が川北交流センター、川南交流センターと呼ばれるようになった。そして市の推進する共生・協働のまちづくりの主体として2013年4月からは、川北に「川北まちづくり協議会」、川南に「支え合う川南みんなの会」という名称のまちづくり協議会が発足した。

2. 大里七夕踊の近年の変化

本章ではこの大里地区で伝承されている大里七夕踊について、筆者が調査を継続している2008（平成20）年から2015（平成27）年までの変化を時系列に沿って記述する。この経緯は、踊りの伝承主体でもあった青年団と地域の自治組織としての公民館が、従来通りの役割を果たすことが困難になるなかで、民俗芸能の伝承という実践を通していかに再編されるかという動態を如実に示しており、コミュニティの再編の様態を考察するのに興味深い事例であると考ええる。

(1) 2008年

筆者はこの年初めて七夕踊の調査を実施した。当初この調査は無形の民俗文化財の保護の観点から、大規模な作り物を特徴とする七夕踊を対象として、その材料や道具の確保に関する実態を調査することを目的としていた。文化財としてのこの踊りの特徴は、作り物・行列物を伴う大規模な風流の構成にあると考えられており、その伝承に作り物の材料の安定した確保は不可欠であろうと考えられたからである。

しかし現地で調査を進めると、二つの点で当初の構想が的外れであったことを知らされた。

その一つは、担い手にとって作り物や行列物は踊りの主たる構成要素とは考えられていなかったことである。もちろんそれらは踊りの特徴を表す要素であり、その実演と継承には担い手たちも年々苦勞していた。しかし作り物や行列物はあくまで踊りを盛り上げる余興的な存在であり、必ずある一定の様式で行わなければいけないという強い制約を伴うものとは思われていなかった。七夕踊を代表する4体の動物の作り物も、いずれかが揃わないのは残念であっても、全て揃わなければ踊りが成立しないわけではない。地域の人びとの記憶にある限りでも、4体の作り物が揃わなかったことは何度もあり、行列物は戦後にも一時的に新しいものが加わったり、かつてあったものが失われたりという変遷があった。

もう一つは、それとは別の点で踊りの継承に強い危機感が持たれていたことである。それは端的には踊りの人員の不足であった。しかしこの人手の不足は踊りを外から眺めているだけではわかりにくい。事実この数年の踊りでも、総勢200人を越える参加者がおり、それだけを見れば人の不足を感じることはない。しかし担い手にとって「人がいない」という問題は深刻であった。その理由は、まず第一に、参加者の中に本来踊りを務めるべき者の割合が急激に減っていることである。多いように見える参加者は、本来務めるべき者の不足をそれ以外の者が埋め合わせている状態なのであった。また第二に、踊りへの参加は集落を単位とし、集落の青年団という組織で参加することが踊りの意義に深く関わってきたのだが、この組織としての参加が限界を迎えつつあったことである。

2008年の七夕は、上に述べたような困難な状況が一つの臨界を迎えた年であった。この年、参加集落の一つである中原が踊りを出すことができなかった。七夕踊は戦後に復活して以来、1年も欠かさず演じられてきたが、その歴史の中で踊り手を出す意志がありながら出せない事態が生じたのはこの年が初めてだという。そしてこの年以來、筆者が調査を続けてきたこの8年間で、14の集落の踊り手が揃ったことは、結局一度もなかったのである。

なおこの年は、清涼飲料メーカーであるダイドードリンコが2003年から行っている全国の祭りの応援企画「日本の祭り」の取材対象となり、踊りの全過程において南日本放送（MBC）のテレビ取材が入っていた。踊り当日には考古学者の吉村作治氏が来訪したり、ひとことパフォーマンスCM（特別番組内で地元の人びとが商品をPRするコマーシャル）の撮影が行われたりするなど、例年以上の盛り上がりがあった。この取材の成果は、同年8月30日に『^{ちとせ}千歳まで願いをこめて～田園芸能 市来・七夕踊～』（制作：南日本放送）として放送され、また2010年2月9日には、BS-TBSの新・九州遺産『薩摩の田園劇・七夕踊』として全国放送された。

テレビの取材が入るということから、保存会と各集落はできるだけ正統な踊りの姿を見せよ

うと工夫を凝らしていた。また上述のテレビ番組が、踊りを通した青年の成長に焦点を当てた内容だったので、青年の修養という踊りの伝統があらためて意識されることにもなっただろう。こうして 2008 年の七夕踊は、この後にみる伝承の危機とそれを克服する改革の起点となった。

(2) 2009 年

この年、前年の七夕に太鼓踊を出せなかった中原集落からは、過去に何度も踊ったことがある庭割の息子さんが踊り手として参加し、志願して一番ドンという大役を務めた。

中原の庭割に話を聞いたところ、彼は集落としての参加はこれが最後になるかもしれないという思いで踊り手を出したという。中原では以前から青年団員の減少は深刻で、早くも 1993 (平成 5) 年の公民館の総会で、青年団員だけで踊りに参加することはできないということが話題に上がったという。この年にはすぐにその具体的な対応はできなかったが、1995 年からは集落の者が総出で踊りに協力する体制を作ってきた。さらにこの庭割は地元の市来農芸高校で虫追い踊りを教える活動をしていた縁を活かして、その OB などに頼んで集落以外からも踊り手を確保するよう努めてきた。年によっては女性が作り物のウシを担いだこともあったという。ある意味でこの後に述べる改革を先取りしていたのだが、青年の減少に加え集落成員の高齢化もあって、大がかりな作り物を維持することはできなくなり、七夕そのものへの参加が難しくなってきた。結果的にこの年は中原が最後に参加した年になった。

また弘山と松原の両集落も、この年は合わせて 1 人の踊り手しか出せなかった。両集落は以前から行列物を一緒に出し、太鼓踊の稽古も合同で行うなど結びつきの強い集落どうしであったが、前年まではそれぞれ太鼓踊の踊り手を出していた。

例年、本番の 2 週間前に当たる日曜日に、各集落の踊り手を報告し、あわせて一番ドンと二番ドンを決める「踊り相談」と呼ばれる会合が開かれる。7 月 26 日に開かれた踊り相談の冒頭で、この年交替した新しい大里七夕踊保存会長は「青年団と公民館が一体となって踊りをやっていこうという部落が多くなってきた。これからの継承のあり方を考えていきたい」という趣旨の挨拶をした。伝統的に青年団が主体となって伝えてきた七夕踊も、そのままでは継承が困難になりつつあった。

(3) 2010 年

この年の 4 月に宮崎県の農場で発生した口蹄疫は、ウシ・ブタなどの家畜に甚大な被害をもたらした。鹿児島県に隣接するえびの市や都城市などには、七夕開催の前月 7 月まで家畜やそ

の死体等の移動を禁止する移動・搬出制限が敷かれていた。鹿児島県でも宮崎県とを結ぶ道路の封鎖や、ブランド肉として知られる鹿児島黒牛・黒豚の種牛・種豚を離島に避難させるなど、大きな社会的ニュースになっていた。こうして数は少ないものの畜産農家がある大里でも、この緊急時に踊りを開催することの是非が話題になった。

大里七夕踊保存会では7月4日に役員会を開催して対応を協議した。役員会では踊りを盛大に催すことは難しくとも、奉納行事として踊り庭で太鼓踊だけでもした方が良いという意見が挙がったという。しかしその後の7月11日に開催した臨時総会で、地域の畜産農家や市教育委員会の意見なども聞いた上で、この年の踊りの中止を決定した。7月15日に各自治公民館宛に、7月16日には関係者・団体に踊りの中止を知らせる文書を配布した。

この踊りの中止は今も大里の人びとの話題に上がる。七夕踊は少なくとも戦後は一度も中止したことがなく、1993年の8月6日の金曜日から翌土曜日にかけて8.6豪雨と呼ばれる豪雨災害があったときにも、日曜日の七夕当日は晴れて上演できたことなどは長く語り種になっている。筆者の経験でも、踊り前の1週間のナラシの期間に雨が続きたり、台風が来たりしても、決して七夕は中止にならないから大丈夫と度々聞かされた。それだけにこの年の中止は住民のあいだに賛否両論を生んだようである。

(4) 2011年

この年の七夕は、同年3月に発生した東日本大震災の影響で全国的に祭りやイベントの自粛が報じられる中、例年通りに開催された。前年の中止の是非がまだ人びとの話題に上る中で、再び中止という判断を下すことは難しかったであろうことは想像に難くない。震災直後は不安定な電力供給の影響もあり、東日本を中心に祭りやイベントの自粛が相次いだものの、夏のシーズンに向けて、苦難を乗り越えて祭りを実施するというニュースが被災地からも届き始めており、七夕を開催することに大きな異論はなかったようである。奇しくもこの年の七夕は、甚大な津波被害の爪痕が残るなか、全国からの支援を集めて実施されたことで大きな話題となった岩手県陸前高田市のけんか七夕と同日の8月7日に開催された。大里七夕踊の会場では、ダイドー「日本の祭り」がこの年の取材予定としていたが震災で中止となった、岩手県の三陸山田祭への募金を行っていた。

大里七夕踊にとっても2011年は再起の年であった。前年の中止は直接的には口蹄疫の流行が原因であったが、その背景には、青年の絶対数の減少、集落青年団単位での祭りからの撤退、青年団に代わる参加主体の組織化の立ち後れなど、それまでに露わになりつつあった慢性的な疲弊状況があったと筆者は考えている。だがそうした問題の伏在はあっても、七夕が実施

されないという虚脱感や喪失感は、地域の人びとにも身をもって感じられたであろう。一度中止を経験したことが、今後の継承に向けて何をすべきかを考える最大のきっかけとなったのではないだろうか。

集落保存会の発足と保存会組織の改編

中福良集落は七夕踊に参加する集落の地理的な中心にあり、踊りの1週間前からナラシと呼ばれる合同稽古が行われ、また踊り当日の最初と最後の踊り庭ともなる堀ノ内庭⁶⁾がある、いわば踊りの象徴的中心とも言える集落である。その中福良集落は、この年から青年団に代わって集落を挙げて保存会を組織し、踊りを継承していくことを決めた。この保存会は参加集落全体で組織する大里七夕踊保存会とは別の、集落内で踊りを保存継承していくための組織であり、新しい踊りへの参加の組織形態であった（以下、大里七夕踊保存会を「保存会」、集落ごとの保存会を「集落保存会」と区別する）。後に多くの集落が採用することになるこの方式の先鞭を付けたことになる。

また保存会でも、七夕に先立つ6月19日の総会において規約を改正し、従来の庭割に加えて各集落で「連絡員」と呼ばれる役職を選出し、これを保存会の運営委員として位置づけることにした。

大里七夕踊保存会は、七夕踊が各集落の青年団が主催であることを尊重しつつ、全体を統括する立場から踊りの実施にかかる様々な支援を行ってきた組織である⁷⁾。規約上は参加集落（公民館）の全世帯がその会員であるが、実務に携わる運営委員会は、従来は各集落の青年団長・庭割・公民館長・その他有志によって構成されてきた。ただし青年団長は踊りを演じる各集落の青年団を統括し、公民館長は集落全体を統括する者である。いずれも自分の集落を代表する立場であって、他の集落や踊り全体を斟酌する立場ではない。そうしたことから踊りを全体的に主導する役割は庭割衆を中心に担われてきた。しかし庭割の実務的な負担の増加に加え、庭割を選ぶことができない集落も増えてきて、各集落の事情をふまえて、全体として問題に対応することが困難になっていた。そこで各集落必ず1名の連絡員を選んで保存会の運営に携わるようにすることで、集落（公民館）と保存会の連絡を密にし、集落間で課題を共有し、協力して対処するようにしたのである。

いちき串木野市でもこの年から支援を拡充し、補助金額を増額したほか、ツアーバスを出して観客の誘致を図るなどを行った。しかしすぐに状況が好転するはずもなく、この年も中原集落は踊りを出すことができず、弘山・松原の両集落も、前年同様、合同で1人の踊り手しか出せなかった。

(5) 2012 年

さらなる撤退

5 年前まで 14 の集落から 1 人ずつ出していた太鼓踊の踊り手は、この年ついに 11 人にまで減ってしまった。筆者が調査を始めてから最少人数での踊りだった。中原の庭割は前年まではなんとか復帰の方法を模索していたというが、この年には「完全撤退だ」と語っていた。弘山・松原も合同で 1 人の踊り手を出すのが定着していた。加えてこの年は陳ヶ迫集落が踊り手を出さず、行列物にも参加せずに、実質的に 2 件目の撤退となってしまった。

陳ヶ迫は世帯数 37、人口 91 人（住民基本台帳、2012 年 3 月時点）で、七夕踊参加集落の中では 2 番目に規模の小さい集落である。陳ヶ迫青年団には当時まだ 5 人の団員がいたのだが、前年（2011 年）の七夕のアガリの際に、全ての青年が太鼓踊を済ませたこともあって、今後の七夕への参加をどうするかが話題に上った。その後 11 月の公民館総会では、集落全体で保存会などを結成して存続することを想定し、先行して集落保存会方式に移行していた中福良公民館から保存会規約を借り受けて配布した。その後も年明けの 1 月総会などで協議が続けられ、義務的に全員が参加するよりも、年齢を問わない有志を集めた同好会などで参加するというアイデアも挙がったという。しかし意見をまとめられないまま 3 月末をもって公民館長が交替すると、それまでとってきた対応がうまく引き継がれず、結局 5 月の総会のときには、この年の七夕には参加しないことが決まってしまったという。

保存会としても、各集落で青年団主体にとらわれない新しい組織化を進めていた矢先のことで、落胆も大きかっただろう。もし集落保存会方式への転換がもう一步早ければ、この事態は避けられたかもしれないという意見を、陳ヶ迫の元庭割や保存会の役員などは述べていた。一方で前年から集落保存会方式に移行した中福良が、太鼓踊に青年を出せなかったものの、地区の壮年たちが 1 週間のナラシを毎晩交替で務めることで参加を果たしており、結果的にこの方式が功を奏することを示した。

女性の太鼓踊への進出

もう一つこの年の七夕には非常に大きな話題があった。それは太鼓踊の踊り手に初めて女性が登場したことである。青年団という男性の若者組織が主体となって受け継ぎ、ある種の青年戒としての機能をもっていた太鼓踊を女性が演じるというのは、踊りの性質そのものに再考を迫る大きな変化だったと言える。

女性にも太鼓踊への門戸を開くというアイデアは、それまでにも皆無だったわけではない。ナラシの木曜日に行われるスエツケという次第が終わった後、堀ノ内庭を管理する和田家の座

敷では、庭割たちが揃って「オカベ」と呼ばれる一丁豆腐を食べる慣例となっている。ある年の調査で筆者もその場に同席したのだが、その際の雑談のなかで一人の庭割が「そろそろ女性が踊ってもいいのではないか」と発言した。その時は別の庭割が「女性では浴衣の尻端折りはできないだろう」といった冗談を言って、その場は笑いに包まれた。その和田家の娘さんは、小さい頃から七夕踊が大好きで、毎年自宅の庭で行われる青年の太鼓踊のナラシを見ながら、いつか自分も踊ってみたいと思っていたという。あるときその希望を男衆に話したところ、「タマがついてなければ踊れないぞ」と言われ、それならその「タマ」を買ってくると言って家を飛び出したという幼少期のエピソードを語ってくれたこともある。そんな冗談がわずか数年の内に現実になったのだから、地元の人びとにとっても大胆な決断であったに違いない。

初めて女性として太鼓踊を務めたのは、この年 21 歳だった平ノ木場の庭割の娘さんである。彼女自身は平ノ木場出身であるが、例年、平ノ木場と合同で作り物を出し、ウチナラシも一緒に行うなど関係の深い堀集落の踊り手として参加した。実は彼女は、小学 4 年生のときに女性として初めて太鼓踊に付くカネンコ（鉦打ち、主として小学生くらいの子どもの役）を務めた人物でもあった。彼女がカネを務めて以来、この役は男女問わず演じられるようになっていく。言わば女性の踊りへの進出の先駆者である。

しかしながら本人は意識してそのような役割を任じてきたわけではない。かつてカネを務め



写真 1：初めての女性の太鼓踊の役者

たのは、父親が開館して間もないかごしま水族館に連れて行ってくれると約束したからだったという。今回の太鼓踊を務めたのも、七夕本番の2週間前の踊り相談の直前に、青年から踊り手を出せない堀集落の踊り手を探していた庭割衆に、父親を通して頼まれたからであった。1週間後にはナラシが始まるという切迫した状況でもあり、自分が出るのが助けになるならという気持ちで、なかば父親の説得に折れたのであって、決して本人が積極的にやりたがったわけではないという。踊りのナラシの間にも、とくに年輩の住民の中からは、「女が踊りきれんわけがない」とか「見栄えのする踊りができるのか」といった冷やかしを言われることもあったそうで、本人は、そんなことを言われてまで自分が太鼓を打つ理由はないと保存会の役員に訴えたという。女性が太鼓を打つということが大里の人びとにとってもどれだけ劇的な変化だったかが、このことからうかがえよう。

(6) 2013 年

踊りの継承への危機感が最も強く感じられたのはこの年である。例年、調査で現地に行くと真っ先に入手するのが、現在は島内集落の庭割も務める人物が2006年から発行している『速報七夕踊』という私設新聞であるが、この年は6月中旬に早くもその「号外」をメールで送ってくれた。後述するようにこの年から踊り相談が本番2ヶ月前に開催されるようになり、そこで決定した一番ドン、二番ドンを知らせるための号外であるが、その裏面には「七夕踊存亡の危機」という大きな見出しがあり、記事中の小見出しも「櫛の歯が抜けるように」「このままでは消える」と緊迫感を露わにしていた。市が発行する『広報いちき串木野』の同年7月号にも七夕踊の記事が掲載され、保存会長が「ここ数年が七夕踊にとって正念場」と訴えていた。市の教育委員会はさらに支援を拡充し、前年に地元のビデオクラブの協力で撮影したビデオを編集したDVD3枚組の記録を作成して全公民館に配付したほか、JR市来駅から門前河原と払山の踊り会場へ送迎バスを出した。

しかしこの年も、新たに池ノ原集落が行列物への参加を取りやめた。池ノ原は世帯数30、人口58人（住民基本台帳、2012年3月時点）と、参加集落の中では最も規模の小さい集落である。太鼓踊には踊り手を出していたので、中原や陳ヶ迫のような完全撤退ではないものの、池ノ原で伝えている薙刀踊は他の集落のそれと踊りの型が違っており⁸⁾、池ノ原以外では代替できないだけに痛手と思われた。

また近年、大半の集落の太鼓踊の踊り手が使用する花笠の製作を一手に引き受けていた人物が、体調を崩してそれを請け負うことができなくなり、この年から各集落の青年は自分たちが笠張りを担うことになった⁹⁾。踊り本番の約1ヶ月前から、中福良公民館に集まって経験者の

指導を受けながら作成した。

改革本格化

2011年の七夕の後、庭割たちの間では、踊りの継承が深刻な危機にあることを認識し、抜本的な対策を講じる必要が話題に上っていたという。前年の陳ヶ迫集落の撤退はその危機感をいっそう募らせただろう。ある庭割は2012年の七夕終了後、「七夕踊りの伝承・発展に向けて」と題した文書を作成した。そこには保存会とは独立して七夕に関わる様々な立場の者を集めた「検討会」を作り、保存会に七夕踊継承のための提言を行う案が示されていた。さっそく翌月には庭割・青年団・連絡員からそれぞれ4名のメンバーを選んで、2012年9月30日に「七夕踊り継承のための検討委員会」の第1回が開催された。以後、同会は2013年3月31日までに6回の検討会を開催して議論を重ねた。

検討会ではまず各集落の人員の実態把握を行った。するとこの先10年程度の間には青年団員がほとんどいなくなると予測される集落が複数あることが明らかになった。この結果から検討会は基本的な方向性として、集落の青年団単位にこだわらず大里地区全体で踊りを盛り上げ、継承していく方策の検討を進めた。検討会は2013年3月から保存会内に「七夕踊り小委員会」として位置づけられ、4月の保存会総会に具体案の提案を行い、その実現に取り組み始めた。

こうして昨年以上の改革が行われ、2013年の七夕では以下のことが実施された。

- 1) 踊り相談を踊りの約2ヶ月前の6月2日に実施した。従来は当日の2週間前であったのを、準備と広報宣伝に十分な時間が取れるように大幅に早めた。
- 2) 市来小学校・中学校に協力を要請した。7月1日付けで保存会から市教育長宛に「市来の七夕踊り」体験参加者募集について（依頼）」という文書が出され、同日のうちに教育長から両学校長へ送付された。
- 3) 市来農芸高校に協力を要請した。同校のPTA会長を務めていた七夕踊の庭割の一人が窓口となった。
- 4) この年発足した川北・川南のまちづくり協議会の総会に保存会が出向いて協力を要請した。これらの協議会には、大里地区にありながら七夕に参加していない平佐原¹⁰⁾、松山、崎野、戸崎（以上川南）、駅前、佐保井、迫田前（以上川北）の各集落が含まれており、撤退した中原、陳ヶ迫も含め、これらの集落からの参加を期待してのことであった。
- 5) 宣伝用ポスターを作成した。この作成は5月中旬に筆者に依頼され、大学院生が作成してくれた図案を6月末に提案し、修正を経て7月中旬に完成すると、庭割衆が手分

けて地区内に配付した。

- 6) 写真コンテストを開催した。なおポスター作成と写真コンテストの実施に当たっては、地元の焼酎蔵で『七夕』ブランドの焼酎を製造販売している田崎酒造がスポンサーとなった。

とくに学校やまちづくり協議会を通して踊りの人員を従来の参加集落以外から広く募集したことは、大里地区の集落青年団を単位として演じられるという伝統を変更する重要な選択だった。結果としてこの年は、地元の市来農芸高校サッカー部員 17 名が、寺迫の薙刀踊と弘山・松原の大名行列の踊り手として参加した。高校生たちは、8 月に入ると部活動の終了後に練習を行ったほか、本番前日にはそれぞれの集落を訪ねて、青年団員と一緒に練習した。迎える青年団の方も、従来は前日に行っていた行列物の準備を 1 週間前にはあらかじめ済ませて高校生たちを迎えた。これ以後、市来農芸高校の学生は継続的に七夕踊に参加している。

「よそ者」の太鼓踊

もう一つの大きな変化は、前年の女性の太鼓踊に続いて、この年も女性の踊り手、それも大里の在住者でも出身者でもない、まったくの「よそ者」の踊り手が登場したことである。その女性は石川県出身で、東京でダンサー、DJ、モデルなどとして活動していた。いちき串木野市出身の写真家と仕事をした縁で訪れたこの土地を気に入って、この年の 3 月から家を借りて川上地区に住んでいた。そんな折り、大里の人から七夕踊の踊り手の不足に苦労しているという話を聞いて、舞踊の経験もあることから自ら希望して踊り手になったという。中福良の踊り手として参加したこの女性は、ナラシの 1 週間も地元の青年と同じように務めただけでなく、ナラシの庭に丸刈りの頭で現れて地元の人びとを驚かせた。

このような踊り手は七夕踊の伝統からすればあまりにも異質だが、前年すでに女性の踊り手があり、その女性自身も熱心に踊りに専念していたため、その存在は異存無く受け入れられていたように見えた。しかし一方で、このときの判断の是非については、数年経過した現在でも様々な意見を聞くことがある。窮余の策としては賛同を得られたとはいえ、今後も同様のことを認める前例としては、大きく条件付きのものと考えられているようである。

(7) 2014 年～2015 年

2013 年の七夕踊り小委員会の改革は、市来農芸高校生の参加をはじめとして一定の成果を挙げたと考えられた。この成果を今後も継続して抜本的な改革とするために、小委員会は 2014 年 4 月 1 日に保存会に対して「七夕踊り実行委員会の設立についての答申」を示し、保

存会の組織改革を提案した。具体的には、保存会内に「寄付金部」「対外協力要請部」「広報・宣伝部」の各実行委員会を置き、それぞれが責任をもって継続的に改革の取り組みを進めるという内容である。

答申書には「今、踊りを青年団だけでは奉納出来ません。七夕踊りを奉納する集落の住民は もちろん、これまで七夕踊りに縁もゆかりも無い方々への協力を求める必要があります」との文言がある。寄付金は経済的支援、協力要請は演者の確保、広報宣伝は観客の誘致と、いずれも踊りに関わる関係性を拡大し、外部の様々な相手と連携し、協力を得ることで踊りを継承していく意志が示されていた。また実行委員会の各部には、庭割・青年団・連絡員という保存会の運営委員を構成する主要な立場からのメンバーに加えて、各部に1人ずつ大里出身で踊り経験者でもある市役所の職員を割り当てた。今後の七夕の実施において、行政の機能を従来以上に利用していこうという担い手の意志がうかがえた。

実際にも2014年以後の七夕踊は、2013年の改革の延長上に実施されている。市来農芸高校からの参加者は、2014年から野球部も加わって総勢30人を越えた。七夕踊全体からみても欠かせない一大勢力になりつつある。同じ2014年には、同市内の私立高校である神村学園高等部から、留学生4人が文化体験の一環として踊りに参加した¹¹⁾。集落の青年団という地縁組織が主体であったのがわずか数年前だったことを思うと、体験参加とはいえその関係性の拡大



写真2：子ども向けの作り物を使った交流

は驚くべきものである。また現在までは地元の小中学校からの参加は得られていないものの、2014年には個人的に応募した中学校2年生1人と、小学校の教員1人が踊りに参加した。2015年には門前の踊り庭に七夕踊が入ってくる前に、子ども用に小さく作ったトラ・ウシ・ツルの作り物を市来サッカースポーツ少年団の子どもたちが踊らせる余興を行うなど、踊り手の裾野を広げる取り組みも行われている¹²⁾。さらに2015年には市教育委員会の職員が一家で参加したり、広報宣伝のスポンサーでもある田崎酒造の社員が参加するなど、企業等を介して七夕に参加するルートも生まれている。

集落ごとの参加組織に関しても近年の改革が踏襲されている。集落保存会方式が効果を認められたことから、他の各集落にも同方式での参加が広まってきた。その結果、2014年の堀、平ノ木場、2015年の木場迫、門前など、青年団の主体性を尊重しつつも、集落保存会を結成して壮年有志が青年をサポートして踊りに参加する方式に移行する例が増えている。

諸々の改革の中で地味ではあるが大きな効果があったと思えるのは、連絡員の存在である。いまや保存会の運営委員会や新設された実行委員会において、連絡員から選出された者が大きな役割を担っている。さらに七夕踊の全体的運営と各集落との間を取り持つという本来の意味でも大きな役割を果たすことがある。一例を挙げると、2013年に行列物を出さなかった池ノ原では、翌2014年に、集落から選出された連絡員が「七夕のことは自分に任せてほしい」と公民館長から一任を取り付けたといい、青年団員と相談の上、前年に不参加だった行列物の薙刀をこの年さっそく復活させた。時間がかかると復活も難しくなるだろうと考えた連絡員が奔走した結果であった。確かにどの集落にも七夕踊に出演することに大きな価値を認めなかったり、好まなかったりする者がそれなりに存在する。完全なコンセンサスなど望めない中で、各集落に牽引役としての存在がいることの意義は大きいだろう。

3. 考察——コミュニティ再編の理解のために

以上、鹿児島県いちき串木野市の大里七夕踊の実践を通して、伝統的な踊りの伝承基盤であったコミュニティの窮状とその再編の経緯を時系列的に記述してきた。当然であるが、このプロセスは現在も継続中である。現時点でこれについて一定の評価を与えることは難しく、またその進むべき方向性を部外者である筆者が与えられるものでもない。本稿の役割は、民俗学の視座によってこのローカルな実践を追ってきた経験を踏まえて、グローバルに進行するコミュニティの再編の様相を一般的に理解するための考察を行うことである。

日本の民俗学においてコミュニティは、自然村としてのムラという地縁的な集団に結びつけ

られ、近代化やグローバル化によって崩壊あるいは消滅しつつあるものとして描かれる傾向にあった。一方で近年は、その「前時代的」なコミュニティ概念の代替として、各種のネットワーク的関係性が注目を集めている。本稿において筆者は、コミュニティを「ムラ」という固有の実態を備えたものとして考えてきたわけではないが、それでもこの事例では、踊りを担う資格や属性が大きな問題とされており、その意味で成員性が問われる集団としての性格が強く、ネットワーク的関係として理解することも適切ではない。

コミュニティの概念も学際的に大きく変容している。ジェラード・デランティの整理に習えば、時間・空間の制約や規範的拘束性にとらわれない、流動的で構築的なコミュニティの理解が主流となっている（デランティ 2006）。とくに筆者としては人類学におけるコミュニティの構築・創造の議論に学ぶところが多く¹³⁾、七夕踊という民俗芸能の伝承実践を通して立ち現れる共同性に注目してコミュニティの姿をとらえてきた。ただしこの事例におけるコミュニティは、^{こじゅう}郷中や部落会などの伝統的な地縁組織との連続性も持っており、また公民館のように現在も日常生活における共同的な相互行為が核になっているものであることも忘れてはならない。それを単純に、帰属を表明するシンボルといたり、状況に合わせて自由に選択可能なものということもまた実態にそぐわないだろう。こうした点に留意しながら、以下では本事例におけるコミュニティ再編の様相を考えていきたい。

(1) 重層的な集団としてのコミュニティ

コミュニティは外部との差異によってその外延が明確化され、閉鎖的に統合された集団と見なされ、またその内部は一体性や均一性が強調され、運命的に結びついた「平板な」集団として描かれがちである。それに対して本事例を理解するのに重要なのは、一つの実践に関わる集団の重層的な構成であり、それぞれの立場からの意見や利害がしばしば矛盾をはらみ、ときには対立するということである。

七夕踊は地縁的な単位で組織された若者組である^{にせ}二才によって伝統的に演じられてきたが、その組織は大正から昭和初期頃に集落ごとの青年団になり、同時に大正末期に成立した全国的な青年団組織の末端機関に位置づけられてきた。また生活共同体としての集落は、明治中期から部落会や農事小組合などの組織が並立していたのが、戦後に自治公民館として再編され、地方行政の最小単位として機能してきた。現在の自治公民館の多くが、かつての青年舎を公民館施設として利用していることに表れているように、それまで集落内にありながら相応に自律的な活動を行ってきた青年団は、この頃から集落の下部組織に従属されていったと考えられる。そして昭和 30 年代に全国的に青年団活動が凋落していく中で、大里の青年団も実質的に集落

を代表して七夕踊に参加することに特化された集団になっていった（俵木 2010）。

一方、青年団の自律性が失われていった昭和 30 年代には、踊りの新しい価値が浮上してくる。それは地域の伝統である文化財としてこれを継承していくことである。七夕踊は 1961（昭和 36）年に鹿児島県の無形文化財に指定され、1970（昭和 45）年に国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択、1981（昭和 56）年に国の重要無形民俗文化財に指定された。また踊りの文化的価値付けという点では、1970 年に大阪万博「日本の祭り」に鹿児島県から唯一選ばれて参加したことも大きな影響を残している。この指向によって、保存会や庭割という、集落個別の事情を越えて踊りの継承本位に全体を統括する組織の重要性が増しており、連絡員の設置にみられるように、青年団や集落をつなぐ組織化が強化されている。

現在の七夕踊は、このように部分的に重なる集団や組織の連携によって実施されている。その連携のあり方の変遷こそがコミュニティ再編のプロセスを理解する鍵である。ある集団や組織から別のものに移行するとか、ある集団が解体して別の集団がその役割に取って代わるというように単線的に理解するのは不十分である。

（2）規範と規則

以上のことを本稿の事例とした近年の改革の実践例から考えてみよう。集落保存会方式への移行は、踊りに関わる青年団の主体性が維持できなくなり、上位の組織である集落に踊りへの参加主体が移譲されたと見られるかもしれない。しかし実際はそう単純ではない。筆者の調査でも、集落保存会の提案を青年団が拒否したという例を聞いており、集落保存会に移行した場合でも、壮年男性たちは最大限に青年の主体性を尊重する点において従来と変わるところはない。保存会も「大里七夕踊は、大里地区当該公民館（以下「公民館」という）青年団の主催として計画実施する」（大里七夕踊保存会規約第 4 条）という前提を崩しておらず、保存会事業の意義はあくまで青年団の支援にあるとしている。その意味で、今も実践の中心にいるのは各集落の青年団であり、青年が結束し、修養を目的として踊りを務めるというのは、伝統的に形成されてきた踊りの最重要の価値として、唯一とは言わないが、簡単には変えられない重みを持ったものと考えられている。しかし現実には青年から踊り手を出せないという事態を迎えて、言わば対症療法的に、青年以外でも踊れる体制を整えつつあるというのがより実態に近い理解であろう。すなわちこれは、青年団という主体が伝統的価値に基づく「規範（norm）」として尊重されてはいても、実質的に踊りを実施するための「規則（rule）」としては成立しなくなっているという事態なのである。

従来の民俗学が「しきたり」などと呼んで重視してきたものは、どちらかといえばここで言

う規範であった。しかし本稿の関心に沿えば、むしろ現実の社会変化に適応するように規範を再解釈したり編み直したりして実現可能な規則を作り上げる局面こそ、コミュニティの再編というダイナミックな様態が浮かび上がるポイントとして焦点化されるべきなのである。ここでは青年団主体という規範を保持しながらも、それに外部の者や外在する価値を接合することで、現在の文脈における踊りの実践とそれを可能にするコミュニティが再構成されているのだと考えられる。

(3) 選択と承認を通して現出するコミュニティ

ここでとくに注目すべきは、伝統的な規範を尊重しつつ、踊りの継承に照準したときに、様々な可能性の中から担い手が何を選択するかということである。

本稿の事例の場合、様々な改革の内容はどれも担い手から内発的に出てきたものである。とりわけ 2012 年の改革本格化以後は、保存会と併立した検討会がアイデアを練り、それが保存会の改組によって実行委員会方式で実現化されている。これを動かすメンバーは、青年団、連絡員、庭割、行政職員など踊りに関わる複数の立場からの代表を意図的に集めて構成されている。この代表制による意志決定の仕組みには、そこに自分たちの代表が出ていることによって、多くの者にこの改革に当事者として関わっていることを意識させる狙いがある。この意志決定に関わる人びとの総体が、踊りの実践にかかるコミュニティの核となる。

小委員会の答申書に「これまで七夕踊りに縁もゆかりも無い方々への協力を求める必要があります」とあるように、この意志決定の仕組みによって、担い手たちは、外部の者を彼らの実践につなげることを選択した。しかし実際には、本当に「縁もゆかりも無い方々」を迎え入れるのは容易ではない。そこで選択の焦点となったのは、つながる相手として相応しい者を見極めることであろう。小委員会の検討の中では、青年の代表から「インターネットで踊り手を募集する」という案も挙がったが、いきなり不特定の他者を受け入れるのは難しく、現在のところ実現には至っていない。それに対して彼らが踊り手の募集の回路としてまず利用したのが、一つは地元の学校であり、もう一つは新しく作られた地域自治組織であるまちづくり協議会であった。そこには現在の彼らの地域の生活において、人のつながりの編成が何を基礎にしているかが反映されている。このように、つながる相手を納得できる範囲で選択し承認していくことによって、コミュニティは新しいかたちで更新されていく。

ところでこのような選択と承認は、排除の機制と表裏の関係にあると考えられるかもしれない。これに関して、2013 年によそ者として中福良集落で太鼓を打った女性を、一つのモデルケースとして考えてみたい。彼女の翌年、中福良では集落の家に婿に入った男性が太鼓踊を

踊った。出自的には同じ外部の者で、集落の青年団に所属したことも無いはずだが、彼が太鼓を打ったことについて否定的な意見を聞くことは全く無く、翌年も同集落の行列物に参加していた。性別が問題なのであれば、その前年に太鼓を打った女性がいたし、むしろその後は女性を排除する意見を聞くことはほとんど無くなった。こうしたことを勘案すると、単純にこれを異質な存在の包摂／排除の問題と考えるべきではなく、むしろつながりの承認に求められる関係の質の問題として考えるのが妥当だと思われる。筆者の考えでは、たとえ異質な者であっても、当人の属性のみで承認の可否が決まるということではなく、可能性としては「誰でも」参加することはできるのである。ただし彼／彼女を踊りの当事者として認めるには、ある程度の継続的かつ恒常的なコミットメントが求められている。しかしそれは相応の時間が経てみなければ判断ができないのである。前述の「よそ者」としての参加の是非を、むしろ後になって聞くようになったのはその表れであろう。一時的な参加者が歓迎されないわけではないが、それが一時的である限りはゲストに過ぎず、持続的な社会関係としてのコミュニティを再編する要因とは見なされないだろう。

最後に外部の存在の承認に関する興味深い一例を挙げておきたい。七夕踊の改革の中で、外部者の取り込みという意味で現在までのところ最も成功していると言えるのは、高校生の協力者たちである。その彼らは作り物の担ぎ手として参加する際に、地元の青年や集落成員が原則



写真3：校名入りのシャツで踊りに参加する市来農芸高校の生徒たち

として白の作業服を着用するのに対して、高校指定の実習着や校名入りの T シャツを着用している。これは高校生の参加を積極的にアピールしたいという保存会の意向によるもので、これによって「彼らが参加できるなら自分も」という呼び水となることが期待されているのである。ここには従来のコミュニティ概念においてしばしば批判されるような強制的な同化の論理は働いておらず、むしろ異質性が許容され、それをつなぐの可能性を開く資源として利用する意図すら認められるのである。

おわりに——コミュニティを動態的に理解することの重要性

以上、鹿児島県いちき串木野市の大里七夕踊の継続的な調査から、民俗芸能の伝承実践を通してコミュニティが再編される様態について論じてきた。第 2 章では筆者が調査を実施した 2008 年から 2015 年までの踊りの変化を経時的に記述し、とくに集落の青年団単位での参加が困難になる中で、踊りを継承するために様々な改革を行ってきた様子を描いた。第 3 章ではこのローカルな実践例から得られた知見を、コミュニティの再編という論点に沿って理解するための要点を示して考察を行った。今後、他の事例との比較などによってその一般的特性を明らかにすることなども意図にあるが、むしろこのプロセスの今後の進展を、継続的に調査する必要をより強く感じている。とりわけ改革のなかで最も重視されていた、大里地区にありながら踊りに参加していない集落からの参加は現在のところ実現していない。この近隣集落からの協力がある程度得られるようになったときには、集落単位で太鼓踊と作り物・行列物を分担し、競い合うという従来の七夕踊とは根本的に異なる共同性が見られるようになるのではないかとというのが、筆者の観測である。

七夕踊に参加する各集落の青年団は、近年まで、ある意味で古典的なコミュニティの理解に近い存在であった。昭和 30 年代頃までは外部者を取り込むことなど考えられず、地縁的な共同性の原理が生きている集団だったと考えられる。しかし筆者がこの 8 年間に見てきた経緯は、伝統的な規範を尊重しつつも、従来通りのやり方に固執することなく、外部の存在を既存の組織や価値と接合して折り合いを付け、新しい共同性を生み出すことで踊りを継承していくとするプロセスだったとまとめられる。このプロセスは、小田亮が「あらたに作られていく出入り自在のネットワークが既存の場へと節合されることで生活の場に再領土化され、まとまりのある共同体が維持されていく」（小田 2004：241）と説いた、再構築された共同体の概念に通じていると考えられる。

このように具体的な事例から得られた知見に基づいて、最後に一つの主張をしておきたい。

それは、考察のいくつかの点でも述べたとおり、ある一時点の観察のみに基づいて当該コミュニティの構成や性質を判断すべきではないということである。コミュニティは確かに一定の価値を共有し、それを核として編成されているように見えるが、その価値は時代ごとに揺れ動かし（七夕踊の場合、「青年の修養」は「地域の伝統」という価値に取って代わられつつある）、それを人びとがどのように実生活の中で体現し享受するかについても、時代ごとの様式がある。またその集団を構成する成員性は、一定の時間の幅の中でのコミットメントの質や度合いに応じて、徐々に承認され、受容される動態的なものと考えられる。このように中心も境界も流動的なものとしてコミュニティを把握し、その変貌のプロセスを理解することが、「コミュニティの再編」の理解には必要であろう。

注

- 1) 必ず1人という規則はなく、かつては各集落から2～3人の青年が出るのが一般的であった。昭和40年代から、青年の減少により集落1人が定着してきた。
- 2) かつてはこれ以外にも参加していた集落があるという。1941（昭和16）年刊の『市来町郷土史』には崎野がウシを出していたと記載されており（市来町教育会 1941）、また小野重朗の報告では同じく崎野が大名行列に参加していたという（小野 1993）。筆者の聞き取りでも、新興住宅地になる以前の佐保井は他集落と合同でウシを出していたという。
- 3) 1911（明治44）年に湊は湊町に編入され、西市木村の大字湊町となった。
- 4) ここで述べた地域の自治組織の歴史の変遷については、別の拙稿でも述べているので、合わせて参照されたい（俵木 2010）。
- 5) 鹿児島県全般における自治公民館の成立の歴史とその機能については、神田嘉延の研究を参考にした（神田 1993, 1998）。
- 6) この庭には、七夕踊の再興に寄与したとされる伝説的な人物である床次^{とこなみとうじゅう}到住の墓とされる碑が立っており、その前でナラシおよび踊りの奉納が行われる。
- 7) 大里七夕踊保存会の成立経緯と具体的な活動内容については別の拙稿を参照されたい（俵木 2011）。
- 8) 池ノ原の薙刀は男踊りと言われる。他に薙刀踊を伝えているのは、下手中、陳ヶ迫・寺迫で、こちらの薙刀は女踊りと言われる。
- 9) これ以前に自分たちが花笠造りを行っていたのは、中福良・木場迫・島内の3つの集落のみであった。
- 10) 平佐原は行政的には大里地区に含まれ、コミュニティ協議会でも川南の「支え合う川南みんなの会」に属しているが、祭礼は隣接地区の湊町の祇園祭に参加している。
- 11) 留学生は、ベトナム出身が2人、インドネシア、台湾出身が各1人だった。
- 12) かつて大里では、七夕踊に出る作り物の小型のものを作って、盆に子どもたちが遊ばせる風習があり、この子ども向けの作り物はそれを再現したものとの見方もできる。小野重朗は、盆の子どもの作り物と七夕踊の作り物は同一のもので、むしろ七夕踊がこの盆の動物の作り物を取り入れたのだと論じている（小野 1993）。
- 13) 代表的なものとして、アンソニー・コーエンのシンボルとしてのコミュニティの構築の議論（コーエン 2005）や、平井京之介らの人びとが選択的に参加する実践の場としてのコミュニティという議論（平井 2012）がある。

参考文献

- 市来町教育会編, 1941, 『市来町郷土史』, 市来町教育会。
- 市来町郷土誌編集委員会編, 1983, 『市来町郷土誌』, 市来町役場。
- 小田亮, 2004, 「共同体という概念の脱／再構築—序にかえて—」『文化人類学』69(2), 236-246 頁。
- 小野重朗, 1993, 「七夕踊り」『小野重朗著作集 南日本の民俗文化Ⅳ 祭りと芸能』第一書房, 126-146 頁。
- 神田嘉延, 1993, 「鹿児島県における村落構造と自治公民館」『鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編』45, 159-178 頁。
- 神田嘉延, 1998, 「公立公民館と自治公民館—南日本の事例を中心に—」『鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編』49, 199-231 頁。
- 木崎三平・木崎正森, 2005, 『ふるさとの伝承—鹿児島県市来町』(私家版)。
- コーエン, A. P., 2005, 『コミュニティは創られる』吉瀬雄一訳, 八千代出版。
- デランティ, ジェラード, 2006, 『コミュニティ—グローバル化と社会理論の変容』山之内靖・伊藤茂訳, NTT 出版。
- 俵木悟, 2010, 「大里七夕踊りにみる民俗芸能の伝承組織の動態」『無形文化遺産研究報告』4, 69-87 頁。
- 俵木悟, 2011, 「民俗芸能の伝承組織についての一試論—「保存会」という組織のあり方について—」東京文化財研究所無形文化遺産部編『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』, 東京文化財研究所無形文化遺産部, 59-79 頁。
- 平井京之介編, 2012, 『実践としてのコミュニティ—移動・国家・運動』京都大学学術出版会。
- 真鍋隆彦, 1972, 「地域社会における民俗芸能の伝承組織 (二) —市来町大里七夕踊りの事例—」『鹿児島大学経済学論集』8, 235-266 頁。